メッセージアウトライン
創世記45:1～28「神の計画」

　ヨセフの計略によりヤコブの末子ベニヤミンがエジプトにとどまらなければならなくなるが、兄のユダは必死のとりなしをしてベニヤミンの代わりに自分をエジプトで奴隷としてとどめてもらうことを願い出る。そして、もしベニヤミンが帰らなければ、彼の帰りを待ちわびている父ヤコブが受けるであろう悲しみ、わざわいを見たくありませんと告げる。
[1-2]「ヨセフは、そばに立っているすべての人の前で、自分を制することができなくなって、『皆を私のところから出しなさい』と叫んだ。ヨセフが兄弟たちに自分のことを明かしたとき、彼のそばに立っている者は誰もいなかった。ヨセフは声をあげて泣いた。エジプト人はその声を聞き、ファラオの家の者もそれを聞いた」
　かつてヨセフを捕え、無慈悲にもエジプトへ奴隷として売り飛ばした兄たちの面影はそこにはなく、ただ父や兄弟を思いやり、身代わりになることさえいとわない深い愛情を感じ、ヨセフの心は揺り動かされた。外見は威厳あるエジプトの宰相の姿をしたヨセフではあったが、ついに彼は自分を制することができなくなって、彼に仕えるエジプト人たちに外に出るようにと叫んだ。
これは人払いをして、ヨセフと兄弟たちだけになって和解の時を持とうとしたからである。またエジプト人に感情的な自分の姿を見せたくないとの配慮もあっただろう。ついにヨセフは声を上げて泣いた。「エジプト人はその声を聞いた」これは部屋の外で聞いたのであろう。「ファラオの家の者もそれを聞いた」…兄弟たちに再会したがゆえにヨセフが泣いた。そしてそのことがファラオの家にも伝えられたということであろう。
[3]「私はヨセフです。父上はお元気ですか」　ヨセフは兄弟たちに自分がヨセフであることを明かした。目の前にいるエジプト第二の権力者が自分はヨセフであるということを通訳なしで告白したのである。兄弟たちはこれを聞いて驚きのあまり、答えることができなかった。それはそうであろう。彼らの心中察するに余りある。
[4]　ヨセフは兄弟たちを自分に近寄らせ、自分が彼らに奴隷として売られたヨセフであることを確認させる。外見は全くエジプトの権力者であるが、よく見るとその顔かたち、声はまさにヨセフである。彼らは昔のあのヨセフを捕え、殺そうとして穴に投げ込み、ついにイシュマエル人の隊商に銀二十枚で売ったことを思い出したことであろう。
[5]「私をここに売ったことで、今、心を痛めたり自分を責めたりしないでください。神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいまし

た」
　彼らの思いを察するようにヨセフは優しく語りかけた。兄たちは父の偏愛するヨセフを憎み、ついに彼を捕え、エジプトに奴隷として売り飛ばした。その結果としてのヨセフの苦しみ、悲しみ、絶望、忍耐の日々は長く続いた。人間的に見ればヨセフは兄たちを憎んでも憎み切れない怒りに満ちた思いをそれまでは持っていたであろう。兄たちはヨセフに身分を明かされて、かつての仕打ちの復讐をされることを恐れたであろう。
　しかし、ヨセフはここで個人的な思いを超えて、神の側の視点に立って語っている。自分があなたがたより先にエジプトに来たことは実は神が遣わしてくださったのであり、それはあなたがたのいのちを救うためであったのだと言う。その詳しい説明は次節以下。
[6]「というのは、この二年の間、国中に飢饉が起きていますが、まだあと五年は、耕すことも刈り入れることもないからです」
ヨセフは確信をもって、飢饉はあと五年続くと言う。ヨセフが神に示されて解き明かしたファラオの見た夢は確実に実現してきた。七年の豊作、それに二年の飢饉が続いた。それゆえあと五年飢饉が続くというのである。ヨセフは自分の私見を述べているのではなく、神に示されたことを語っている。それゆえ、今後もそのとおりになるのである。「耕すことも刈り入れることもない」とは、耕しても刈り入れる実りはないという意味。
[7]「神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのは、あなた方のために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによって、あなたがたを生き延びさせるためだったのです」
　カナンの地にいれば飢饉のために飢え死にする危険性がある。それで、神はヤコブの一族を救うために自分をこのエジプトに遣わしてくださったのだとヨセフは言う。「残りの者」とはその子孫をも含めて滅ぼされないで残されたヤコブの一族、イスラエル全体のことを指すのであろう。
このようにイスラエルが選ばれているのは、彼らが特に素晴らしかったからではなく（彼らの歴史を遡ってみればそれはよくわかる）神の恵みとあわれみによることなのである。
[8]「ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです。神は私を、ファラオには父とし、その全家には主人とし、またエジプト全土の統治者とされました」
　ここにヨセフの信仰がはっきりと表されている。彼の今までの悩み、苦しみ、悲しみ、忍耐、そしてエジプトのファラオに次ぐ第二の権力者とされたのは、すべて神のご計画によることであった。そして神は私を用いてイスラエルを救おうとされ、そのために神は私をエジプトに送られたのだ言う。

私たち信仰者がすべてこのような信仰の視点から、人生に起こるさまざまな苦しみ、悲しみ、理不尽な出来事、人間関係のトラブルなどを見ることができるならば、憎しみや怒り、絶望などの感情に振り回されることなく、安定した平穏な生き方ができるであろう。

私たちは神のみことばである聖書に聞き、学び、それを自分に適用することが必要である。→Ⅱテモテ3:16~17　たとえば、自分に対して不当な扱いをし、傷つけるような人々に対しては→ローマ12:19~21、2:6~8

ヨセフのエジプトでの苦しみと忍耐は無駄ではなかった。そこで彼の信仰は生きたものとなり、成長し、ついに神の視点に立って物事を考え、とらえることができるようになったのである。

「神は私を、ファラオには父とし、その全家には主人とし、またエジプト全土には統治者とされました」とは神がヨセフをファラオには父親的助言を求められる者、王の友、相談役、そしてエジプト全土を実務的に治める者としてくださったという意味である。信仰者の人生はたとい長い苦しみの道を通らなければならないとしても、決してそのままでは終わらず、ついには神の恵みの時が来て、突然思いもよらなかったすばらしい道が開ける。すばらしく祝され、用いられ、輝く時が来る。そのような人生なのである。ただ忍耐が必要。→ヘブル10:36

[9-11]「どうか、急いで父上のところに上って行き、言ってください。『息子のヨセフがこう言いました。「神は私をエジプト全土の主とされました。ためらうことなく私のところに下って来てください。ゴシェンの地に住んで、私の近くにいてください。父上も、子と孫、羊と牛、また父上に属するすべてのものも。飢饉はあと五年続きますから、父上も家族も、また父上に属するすべてのものも、困ることがないように、私が父上をそこで養いましょう」と。』」

「ゴシェンの地」…ナイル川の河口地帯の東部にあったと考えられている。ヨセフはヤコブの一族を速やかにエジプトに導こうとするのである。

[12]「…、弟ベニヤミンも」ヨセフは同じ母ラケルの子であるゆえの親しみから、ほとんど本能的に他と区別している。同時に父に特別に可愛がられている関係から、父の心を動かすのに彼の力が大きいと考えたのでもあろう。

[13]「エジプトでの私のすべての栄誉と、あなた方が見た一切のこと」

特に実情を知りにくい立場にある父ヤコブに対して生活の保証の裏付けとしての今の栄華に輝き勢力のある姿を知らせることは有効な説得の手段である。

[14-15]「彼は弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンも彼の首を抱いて泣いた。彼はまた、兄弟みなに口づけをし、彼らを抱いて泣いた。それから兄弟たちは彼と語り合った」

これはヨセフの家族への愛に満ちた思いを表す感動的な場面である。

[16]「ヨセフの兄弟たちが来たという知らせが、ファラオの家に伝えられると、

ファラオもその家臣たちも喜んだ」
　ヨセフ個人とその家族の出来事が、そのままファラオの宮廷の最大の関心事として扱われる。それだけヨセフが彼らにとって身近であり、重要な存在であることを示している。ファラオや家臣たちがこのような友好的な態度を取ることは、ヨセフのエジプトに対する功績が大きかったということとともに、神がそれをも用いてファラオを動かし最善の結果に導かれたということであろう。
[17-20] ファラオはヨセフに、兄弟たちに言って、すぐにカナンの地へ戻って父と家族を連れて私のもとへ来るようにと告げる。そしてファラオは彼らにエジプトの最良の地を与え、最も良い物を食べさせると破格の待遇を示す。さらに父と子どもたち、妻たちのためにと言って車をも提供する。これはこの頃から使われるようになった馬に引かせる車のことと思われる。それはファラオの宮廷のもので豪華な装飾のしてあるものであったであろう。
[21]「そこで、イスラエルの息子たちはそのようにした。ヨセフは、ファラオの命により、彼らに車を与え、また道中のための食料も与えた」
　ヨセフの個人的なことばだけではなく、ファラオが直々にこのように好意に満ちたことばを述べて、しかも父を迎える車さえも準備される。兄弟たちには深い感動であったに違いない。
[22]「彼ら一人ひとりに晴れ着を与えた…」
「晴れ着」…普段着よりも上等な服。一張羅。ベニヤミンには特に多くのものが与えられた。→銀三百枚と晴れ着五着。
[23] 父にはエジプトの最良のものを積んだろば十頭と穀物とパンと父の道中の食料を積んだ雌ろば十頭が送られた。最高の待遇である。
[24] こうしてヨセフは兄弟たちを送り出した。「道中、言い争いをしないでください」これは兄たちが父ヤコブにヨセフのことを報告するとき、父はヨセフが生きていたことを喜ぶであろうが、同時に今まで息子たちにだまされていたことに怒りを持つに違いない。そのことを考えて、今まで黙っていたこと、父を欺いていたことの責任は誰が取るのか、誰が一番悪いのかなどという争いが道中で起こることが十分予想される。それでヨセフはこのように釘を刺したのであろう。
[25-26]「彼らはエジプトから上って、カナンの地、彼らの父ヤコブのもとへ戻って来た。彼らは父に告げた。『ヨセフはまだ生きています。しかも、エジプト全土を支配しているのは彼です。』父は茫然としていた。彼らのことばが信じられなかったからである」
　カナンの地へ戻った息子たちの報告は、父ヤコブにとっては信じられず「茫然として」しまうような内容であった。ヨセフが生きていることが全くの驚きなら、エジプト全土を支配しているということは全く考えもつかない、想像もできないことである。

[27]「彼らは、ヨセフが話したことを残らず彼に話して聞かせた。ヨセフが自分を乗せるために送ってくれた車を見ると、父ヤコブは元気づいた」
　息子たちはさらにヨセフが話したことを残らず話して聞かせた。そこでヤコブは神のご計画が人のあらゆる思い、行いを超えて実現しているのを気がつくようになってきたのではないか。
息子たちが作り話をしていない証拠に、ヤコブのためにと送られきたエジプトの豪華な車が目の前にある。これはエジプトへ来るようにというヨセフとファラオからの招待状のように見えたであろう。それで、彼らの父は元気づいたのである。
[28]「イスラエルは言った。『十分だ。息子のヨセフがまだ生きているとは。私は死ぬ前に彼に会いに行こう。』」
　ここでヤコブからイスラエルへと名前が変わっているが、「イスラエル」とはあのヤボクの渡しで神との格闘の結果、神から与えられた名前であり、それは神の契約の民としての面を強く表している。「ヤコブ」とは彼のもともとの名前であり、彼の人間的な面、肉的面を表している。それで、ここでは創世記の筆者が、ヨセフとファラオからの贈り物と車を見て元気づいたヤコブが彼の家のための神の導きを強く感じたと判断してイスラエルという名前を用いたと考えられる。
イスラエルはついに重い腰を上げてエジプト行きを決心する。老齢に達しているイスラエルは自分が死なないうちにヨセフに会いに行くことを願って行動を開始したのである。そしてここからイスラエル民族のエジプト滞在の歴史が始まる。４百年以上にわたるエジプト滞在中にヤコブの一族は数えきれないほど増え、イスラエル民族となり、神の契約の民としての自覚を持ち、神の救いのご計画の中で用いられていくことのなるのである。
　ヨセフは兄たちに憎まれ、捕えられ、エジプトに奴隷として売られたことは紛れもない事実であるが、しかし、それはまた将来においてイスラエルを救うための神のご計画の中にあった。
ヨセフがエジプトの第二の権力者となったこと、飢饉のゆえに兄たちがエジプトへ食料を買いに来たこと、ヨセフと兄たちとの一連のかけ引き、弟ベニヤミンのためのユダのいのちがけのとりなし、そして感動的な和解。これらすべての流れの中でヨセフはイスラエルを救うための神の御手、神のご計画を強く感じ、「私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです」(8)ということができたのである。
　私たちも長い人生の中で嵐のような出来事に翻弄されることがあり、なぜ、どうしてと苦しみと悲しみ、涙のうちに叫ばなければならないことが出てくるかもしれない。しかし、それもすべて神の御手をとおして起きてくることならば、私たちは忍耐と信仰をもって神の恵みの時、あわれみの時、救いの時、道の開かれる時を待ち望まなければならない。

→ヤコブ1:2~4、ヘブル10:35~36